

史料を読むということ

呉 座 勇 一

拙著『応仁の乱』の刊行以降、様々な職業の方とお話する機会が増えた。それらの経験から推測すると、どうも歴史研究者の言う「研究」がどのようなものか、一般の人には分かりにくいようだ。

歴史研究とは、史料を通じて過去の事実を明らかにする営為である。そして史料とは人間の行動や思考の痕跡である。考古学の発掘調査によって発見された遺跡なども史料だが、歴史学で主に扱う史料は、文字で書かれた文献資料である。

特に日本史研究の場合、多くの文献資料は日本語で書かれているので（近代以降は外国語史料も増えるが）、日本人なら誰でも読めると錯覚する人も散見される。もちろん近代を研究する場合、「くずし字」と呼ばれるニョロニョロ文字を読まなくてはならないというハードルがあるが、活字化されているものも少なくない。

たとえば織田信長が出した現存文書は『増訂 織田信長文書の研究』（吉川弘文館）という本に網羅されている。しかもこの本は、読み下し文や内容解説も載っているため、一般の方でもとつきやすい。こうした便利な本を使えば、誰でも歴史研究ができるかと勘違いする人が出てくるのも無理はない。

しかし、前近代の史料はやはり現代文とは違う。高校で習う古文・漢文の知識は必須だが、

それだけでは十分ではない。私が専門とする中世史の場合、多くの史料は和製漢文（変体漢文）で書かれている。和製漢文というのは本場中国のそれとは異なる日本風の漢文のことで、仮名が混じらず漢文だけでつづられているが、正規の漢文にはない独自の用字・語彙・語法を含む。文末に「くに候」と書いたりする、あれである。この和製漢文に慣れないと、中世史料を正しく解釈することは難しい。

だが文法・語法を頭に詰め込み、和製漢文のパターンをある程度把握したとしても、正確に読解できるとは限らない。以下に一例を挙げよう。

天正一〇年（一五八二）六月二日に本能寺の変が起こった時、徳川家康は僅かな供を連れて堺を見物していた。家康は京都に戻る途中に凶報に接し、命からがら本国の三河に逃げ帰った。俗に言う「神君伊賀越え」である。この時、家康に同行し途中で別れた穴山梅雪が命を落としたことから（諸史料から落ち武者狩りに遭ったと考えられている）、伊賀越えがいかに危険な逃避行であったかが強調されてきた。

ところが、この通説に対し、在野の歴史研究家である明智憲三郎氏が異を唱えた。徳川家康は本能寺の変を事前に知っており、逃亡計画を十分に練っていたため、安全に三河に帰れたという。しかも家康は、道中で邪魔者の穴山梅雪に切腹を強要して、後にその領土を奪ったと主張している。

この珍説の根拠として挙げられているのが、徳川家康の家臣である松平家忠の日記『家忠日記』天正一〇年六月四日条である。「家康いか伊勢地を御のき候て大濱へ御あかり候而町迄御迎ニ越候、穴山者腹切候、ミちにて七兵衛殿別心ハセツ也」とある。家康が伊賀、伊勢を経て海路で三河の大浜（現在の愛知県碧南市）に到着したので、松平家忠が迎えに行ったのである。

る。なお七兵衛殿とは、織田信長の甥で明智光秀の娘婿である津田信澄のことである。光秀の縁者なので本能寺の変への関与を疑われたのだ。

明智氏は「穴山梅雪は一揆に殺されたのではなく、自分で腹を切ったのです。しかも、大浜に帰り着いてから切腹したと読めます。また、信澄謀反は噂に過ぎないと「聞いた」という伝聞の書き方をしているのに対して、梅雪切腹は伝聞の書式をとっていません。自分自身で確認できたこととして書いています」と解釈している。要するに松平家忠が穴山梅雪の切腹を目撃した、あるいは梅雪に切腹を強いた当事者（家康家臣）から直接情報を入手した、という理解である。

字面だけ追っていると、そういう解釈も成り立つように見える。しかし残念ながら、活字になっっている刊本だけを見ている場合にのみ成り立つ議論である。原本とは言わずとも、写真だけでもチェックした方が良い。

『家忠日記』の天正一〇年六月三日・四日条は後からの書き入れが多く、記述が整理されていない。津田信澄が謀反に参加しているという噂を聞いた後、「信澄の荷担はデマらしい」と後で否定するなど、本能寺の変に関する正確な情報が入らず混乱している様子がうかがえる。

次から次へと入ってくる真偽不明の情報を処理しきれず、手あたり次第に書いているだけだから、「家忠の記述の順」に深い意味はないし、「穴山者腹切候」と断定的に書いているから伝聞情報ではないという解釈にはならない。

仮に家康が梅雪を切腹させたのなら、家忠は切腹の経緯を家康周辺からいろいろ聞けるから、『家忠日記』にももう少し詳しい記述があるはずだろう。伝聞情報だから「腹を切った」としか書いていないのだ。『家忠日記』の記述は、本能寺の変という予想外の事態に直面した家

忠が動転していることを示しているにすぎない。

史料を読むという行為は、逐語的に解釈すれば良いというものではない。記主が常に文法・語法的に正しい文章を書くとは限らないことを念頭に置き、高校古文・漢文的に無理やり訳すのではなく、文章の乱れに注意し、乱れている原因（たとえば記主の心身の不調）まで考えなくてはならないのである。

さらに明智氏は、徳川家康と明智光秀が共謀していたと論じている。「実は家忠の日記を読んでも、どこにも出陣の目的が「光秀討ち」にあるとは書かれていない」から、家康の出陣は「光秀討ち」ではなく実は「光秀救援」なのだ、と主張する。けれども、光秀討ちと書いていないのはそれが自明のことだからだ。

松平家忠は織田信長を「上様」、信長の息子の信孝を「三七殿」と呼び、光秀のことは「明知」と呼び捨てである。家忠から見ると光秀は謀反人にすぎないのだから、出陣と書けば、謀反人光秀の討伐に決まっている。もし出陣の目的が光秀討伐ではなく光秀救援としたら、家忠は驚愕し、そのことを日記に書き記すだろう。

拙著『陰謀の日本中世史』でも指摘したが、陰謀論を唱える在野の歴史研究家は、史料に書いてあることをきちんと読まずに、「史料に書いていないこと」に過剰な意味を求めがちだ。史料に書いてあることはきちんと読解しなくてはならないが、「史料に書いていないこと」については想像を好きにだけ膨らませることができずからだ。

私たちは史料を介してしか歴史的事実を解明することはできない。この当たり前の真理を自覚しながら研究を進めることは、思ったより難しいのである。

（国際日本文化研究センター助教）